
幻想の運び屋 改訂Ver

Seven dayS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想の運び屋 改訂Ver

【Nコード】

N6489X

【作者名】

Seven days

【あらすじ】

今昔のいつの時代も変わらず、商業の中には必ず物流と言う要があり、それを消費者たちは必ず必要としてきた。（前略）

そして、それは採る者（生産業）がいて、運ぶ者（運送業）がいて運び、売る者（商業）がいて……

買う者（消費者）がいて消費し、成り立つのが商業であるというのも何時の時代も変わらない。（中略）

……これは、そんな運ぶ者に属す

る物流の要。運送と言う名の仕事をする、幻想入りをした男の話である。

『よく分からない？

そりゃあ、しゃあない話さ。

俺がこんなんだからだからな。』

幻想の運び屋の修正版になります。（ちなみに、ここに話が追加されていれば、あちらも改訂されていることになります。）

始まり始まり（前書き）

諸事情により作り直しました。

今作の目標はクオリティーを上げる事……

始まり始まり

やあ、俺は上松光という者だ。

んで、俺はとある時に幻想郷に来てしまった悲しい元高三。

……普通に悲しくないっただろって？

まあ、本心はそんな感じ。……なのだが
でも、ここは空気を読むべきだろ？

ああ、そう…

そんな配慮は別にいらない。

はい、そうですか。

何かすみませんね。

………え？どのように今までやって来たかつて？

何か話が突然ぶっ飛んだな

分かった、分かった……って、本当に分かったからそんな顔はする
なよ…

~~~~~

「卒業証書授与。」

あゝあ、また退屈で暇な時間が始まったよ。  
まったく、この長さには毎回呆れさせられる……ぜ

「あゝあ………」

卒業証書授与ってさ、自分がもらうまでが長いかそれとも待つのが  
長くてしんどいよね。  
でも、はつきり言えば真ん中でも変わりはしないんだけれども。

「あゝあ………」

よし、決めた……俺は寝る!!  
さてと、寝るか

………

と、言う感じに俺は不謹慎極まりないことをやった訳だ。

んで、「ああと、信じられない。　昼寝？をして起きてみれば  
知らない所に。（棒読み）」

「で、あんたは誰なの？」

「てか、『知らない天井だ。』と言わせてくれ。」

「……………」

「悪い悪い。」

で、ここは何処なんだ？」

「私の家だけど。」

「違う違う。市とか町とか村とか（ry」

「し？ ちょう？ なにそれ？」

「はあ！？」

「いや、○○県○○市とか○○町○○村とか……は？」

「じゃあ、あんたは外人なんだね。」

「外人人？」

まあ、だいたいこんな感じに俺は幻想入りした訳だ。

……簡略的過ぎるって？

いや、大雑把すぎる？

そんなの俺は知らん！！

それに、いずれに分かるさ。

うん、多分。

「光〜！！ 仕事は大丈夫なの！？」

あつといけね……

「ああ、今から行くから大丈夫だ!!」

まあ、今日はこのくらいでよろしくお願いしますよ。  
俺はこれから仕事があるんでね。

何の仕事をしているのか？

それは簡単に言えば『物流』がキーワード。

まあ、これで分かる…筈。これだけ言えば分かるだろ？

~~~~~

ガラガラ………

倉庫の扉を開けた俺に飛び込んできた光景………は。

「うわっ!! 今日はやたらと多いな…」

俺は倉庫を開けて昨日に受け付けた荷物の量を見て驚いた………うん、びつくら驚いた。

昨日は人がどんどん来るからちよつと調子に乗り過ぎたな

……まあ、どっちにしろ生きていく為にはやるっきゃあないんだが。

いや、仕事が面倒臭いとか、しんどいとか……そんな訳じゃないんだぜ？

「よいしょっと……！」

俺はひとつひとつ丁寧に荷物を荷台に乗せていく。

正直、これが一番手が込んでいて一番疲れるが、肝心な物が壊れてしまつとマズイので、まず気は抜けない。

いや、抜きたくても抜けないんだ。

前にも類似した事を言ったが、俺はこれで飯を食って生活させてもらつてる。

さらに、仕事と言うものはシビア。

何かのミスをしたら信用を失ったら俺の仕事は終わり。

まあ、どの時代も同じだろうけど……

「これで、最後だな……！」

最後の宅配便を持ち上げると、気合いを入れて持ち上げる。

「よいしょっと……！」

やはりジジくさいような掛け声を出して最後の荷物を荷台に積んだ。実のこと、いつもは荷台が三分の一か多くても半分くらいなのにも関わらず、今日は助手席にも荷物があるくらいに多い。

まあ、その分収入がこーゆー時に多いがな。
苦勞と収入は比例する。あくまで身体的な苦勞なので疲勞だが……

「おーい！！　　光ー！！」

おっと、何だか呼ばれてるみたいだ。

く少年、移動中……………く

俺が店の倉庫の出口までに出て行くと

「この荷物を夕方頃迄に届けてほしいんだが……………」

いつも、いろいろな面でお世話になっている酒屋のおじさんが居た。

「ああ、別に夕方頃迄なら大丈夫ですよ。」

まあ、おそらくどんなに運ぶ荷物が多くても、絶対に夕方頃なら間に合う筈だ……おそらく。

それに、おじさんにはいつもお世話になっているからな
それを考えれば簡単には断れないし。

「ああ、頼むよ。」

「行き先は？」

「ああ、例の銭（ry）」

長いので、省略させてもらう。
滞納してるのは分かったから。

俺には愚痴らないで……………くれ。

「で、このビール10ケースと日本酒が三十本。
そして、請求書運べば良いんだな？」

「ああ、頼んだよ。荷物は店に取りに来てくれ。」

と、言うとおじさんは走って帰ってしまった。
まあ、気にする事でもないか。

あの人も自分の仕事があるし……………な。

というか、この酒の量は多すぎないか？

宴会をやつてるとしても一回に頼む量が……………まあ、もつとつでもいいか。

そして、俺は荷物を運ぶのにいつも使っている軽トラへ乗り込むと
エンジンキーを挿してキーを回し、エンジンを掛けた。

ブロロロ

うん、大丈夫だな。

そして、荷物を運ぶ場所の一覧表を見て確認すると……………

「さてと、時間もそんなにないし……………行きますか!」

俺は軽トラのアクセルを強く踏んでエンジンを回し、車を勢い良く発進させた。

お得意様と思いつけた俺（前書き）

ストーリーが修正前とは変わりそうな予感が……

お得意様と思いつけた俺

さて、今日に運ぶ場所、配達先は人里の。。。さんと。。。さん。（ry
そして、こーりんと滞納者だな……

（ちなみに、滞納者と言うのは博麗霊夢のことだ。）

こーりんはガソリンを買ったりしたりしてるから良いが、あの、巫女はな……

まあ、本人の前では殺され兼ねないから言えないけど。
いろいろとあるし、ヤバいんだ。

言いたいことはたくさんあるさ。

でも、理不尽な事に力の差は歴然。

さらに俺はスペルカードを持たない………いや、諸事情的に持ちたくはない。

まあ、戦えないその時点で何も言えない訳だ。いわゆる…無条件で戦いを挑まれ、そのままの圧倒的な実力差で叩き潰されるという理不尽さ極まりない出来事を避けるためにな。

キキキッ！！

おっと、そういえば……あのお得意様を忘れてたな。
あそこはちゃんとやっとかないと行けないんだ。

何故かって？

そんな事は行けば分かる。

通常なら縁も無いような大きさの屋敷の前に車を停止させると、荷台から荷物を取り出して鍵を閉める。

そして、門の前で止まって溜め息を一度つくと、「すみませ〜ん、宅配便です！」と、叫び声とはいえないもののそれに比例するような声を俺は発した。

~~~~~

俺が運送業を始めたのは数ヶ月前。

きっかけとかは今言うことじゃないが、営業当初は車、自動車自体が珍しく……いや、いろいろな理由でうけなかった。（自動車自体が走っていなかった為だろうが。）

まあ、いろいろだ。いろいろな理由があるから突っ込まないでくれ。頼む。

で、ここからが本題だ。

……ある時からその受けなさが変わったんだよ。

ある時から……な。きっかけとかは今言うことじゃないが……一番最初、営業当初は車、自動車自体が珍しく……いや、いろいろな理由でうけなかった……まあ、いろいろだ。いろいろな理由があるから突っ込まないでくれ……頼む。

で、ここからが本題だ。

……ある時からそれは変わったんだよ。  
ある時から……ね。

確か、それは俺が運送業を始めてから何週間かたった日の朝方だった……っけかな？

いない？

いや、今日は何となく話したいから話させる。

くくく

とある日の朝方…

「あゝあ………」

今は朝の5時……

俺は今日も少ない荷物の為に早く起きている。

やっぱし……眠い。

そして、今日も軽トラと運ぶ荷物が置いてある倉庫へ行く。  
眠いな…

ガラッ

俺は家から倉庫に繋がる扉を開けて倉庫の中に入ると、今日の配達

物が置かれている場所へと向かって歩き出す。

そして、俺が愛用する軽トラの横を……「……………って、えっ!？」

何故、突然俺が何に驚いたかつて？

それはな…………

「……………」

静かに軽トラの前でしゃがみ、凄く真剣に軽トラを観察？をしている少女がいるんだよ。何故だ？

まあ、観察してる時点で強盗じゃないし、別に何か物を壊しに来た訳じゃない。多分。

しかし、な、何か何だか気味が悪いんだよ。

俺は普通に音を発ててこの中に入って来たし、歩く時も足音がしたはず…………

それに、鍵は閉めてるのに一体何処から入った？

強盗ではなく、壊しに来た奴でも無い。

一体全体どうなってる？

まあ、俺はこう自問自答をし、考えながら数分間少女が動かないか待つことにした。

~~~~~

が、数分たっても「……………」全く少女は軽トラのそばから

動かない。

いや、動こうとしないのか？

じっと軽トラの周りを移動しながら観察している……

さらに、まだ俺という人物の存在に気がついていない。

これは、どうしたものか？

気は進まないけども、しょうがないかなあ。

俺は、そう思うと背後から音をなるべくたてずに近寄る。

そして、

トントン……

少女の肩を軽く叩いた。

すると、

ビクウツ！！！

跳び上がるように背筋を伸ばし、固まってしまった。

で、何だか見たくない現実がすぐそばにあるらしく、ゆっくりとこちらを向きはじめる。

それはまるで、漫画やアニメのよう……だ。

「……………」「こちらを完全に向いた少女は真っ青になった。

えっ？

何で？

「おゝい……………」

顔の目の前で手を振っても、頬を指で突いても何も反応しない……
……いや、別にやましい事など考えてもいないし、してもいない。

しかし、何故？

てか、頬が気持ちいいな。

まあ、これ以上待っても拉致があかなそうだから、作業を続けるか、
それとも少女が復活するのを待つか……………どうする？

一瞬考えた俺だが、
まあ、当然のこと

『……………よし、作業するか！！』

となり、結局俺が最初に折れた。
俺は立ち上がって荷物を置いてある場所へ行き、荷台に運び出す作業を始める。

暫く時間が経ち、残りの積み込む荷物も少なくなってきた頃。

あの頬さわり心地が良かった少女は……………「あゝ……………」つ
いに、声をかけて来た。

「うん？ 何？」

対応の仕方は迷ったが？

とりあえず、恐怖心を与えないように……いや、誤解を与えないように笑って返事を返す。

「えっと、その……… ごめんなさい！！」

が、返ってきた返事は正反対。

……… 笑顔が誤解されたのか？

「い、いや……… 大丈夫だよ。」

「ほ、本当にごめんなさい！！」

「だ、だから大丈夫だって……」

一応、謝られるのは予想の内だったけれども……こんなに謝られると、何だかかなりひょうし抜けするな……

まあ、そんな彼女は彼女で俺に対して謝らなければ気が済まないだろうなんだろうけれど。

「で、その、もしかしたら………」

え？

突然、どうした。

……… 一体何だ？

「……………」

「あれに乗せてくれませんか？」

「うおおー!!」

ドテッ!!!

「大丈夫ですか!？」

「あ、ああ……………」

流石に初対面の人に期待をした俺が馬鹿だったな……………うん。

いや、別に变なやましいような事を考えてた訳じゃあないよ……………ホントだよ？

「別に良いさ。運ぶ荷物もそんなにないし。」

「あ、ありがとうございますー!!」

まあ、良い暇つぶしになりそうだから良いさ。

~~~~~

……………まあ、そんな感じに宅配に乗せて行ったら。

「また、乗せてくださいね!!」

と、目を輝かせて言ってきた……………何か、災難？

で、この出会い、俺の上手く行くようになったきっかけだな。

いわゆる『ロコミ』がその時から広がったらしい。

話が分らない？

そりゃ、俺もわからないから仕方ないさ。

ただ単に俺は話したかっただけだからな。

少しだけ思い出して考えふけていた俺。

しかし、時は止まらない。

そんな俺にたいして目の前にある門が迫ってきた……いや、開けたから迫ってきたんだがな。

「おっと、危ない………だから突然門を開けるなって。」

「今日も来てくれたんですね!!」

「ああ、そうだな………荷物を運びに来た意味でな。」

「そんなに荷物が多い訳ないじゃないですか。そんな嘘を並べて私を振り切れると思ったのですか？」

彼女は何にも自分の考えが間違っていないような勝ち誇った笑みを俺に見せ、まだ発展途上で無いような胸を強調させてしまっている事にも気がつかずに胸を張る。  
そして、嬉しそうにそう言った。

しかし、何か、何となく普通に俺の心の中が傷付くような事を言うな……

「じゃあ、見てみる!!」

少し、苛立った俺は、彼女に背を向けて自らが運転する軽トラを停車させている場所まで歩いていく。

そして、そのまま歩いて軽トラが停車している場所まで辿り着いた時、彼女は絶望したような表情を俺に見せてこう言った。

「……………そうですか、私は見捨てられたんですね」

えっ!?

「てか、助手席が乗れなかったら何処に乗るんだよ？」

普通、何処にも乗れないだろ？  
いや、何処に乗せれば良いんだ……

「そんなの……………」

な、何か嫌な予感がする……………な。

俺はその嫌な予感を背に一步彼女から引いて、彼女の解答待つ。

「そんなの……………／／／  
そんなの光の膝の上に決まってるじゃないですかああああ！！／／  
／」

ま、ま…………マジで！？

彼女は頬を紅く染め、息を荒げて何か恥ずかしそうに俺を見ていた。

恥ずかしいなら、言わなきゃ良いのに…………

「さ、流石に…………あ、危ないだ「いや、大丈夫ですよ！！」……………」

「だから……………」

「だから何ですか？」

『だから』と言ってその後言葉と並べようと思った俺だったが、ふと視線を彼女に向けると彼女の目には涙が貯まって来ており…………仕方ないか…………

「分かった分かった……………」

しかし、俺が許可を出した瞬間…………彼女は下を俯いたかと思うと、

そのまますぐに顔を上げて点数をつけたなら100点を軽く取れる  
ような笑みを俺に送ってこう言う。

「それで良いんですよ（ニコッ）」

結局、また押し切られたな……………

「阿求はわがままだなあ」

「光がマイペース過ぎるんです!!」

そう、彼女こそが俺の常連客第一号であり、俺に好意を向けている  
……………九代目阿礼乙女で稗田家当主の稗田阿求である。

まあ、

マイペースなのは否定しないけど……………この軽トラってそんなに面  
白いか？

今はそんなのはどうでも良いか？

それでも阿求は当主だから……………自己主張が激しいのか？

の、ような疑問が以前に浮かんだことがあったようななかったような……… 気もする。

「じゃあ、行きますよー!!」

「わっかったよ。」

の、ような疑問が以前に浮かんだことがあったようななかったような………

「じゃあ、行きますよー!!」

「わっかったよ。」

結局、今日も押し切られた俺は軽トラに乗り込み……… その次に阿求を膝の上に乗せる。

そして、シートベルトを閉め……… 「じゃあ、行くか………」

「出発進行!! ですね。」

阿求の声と共に発進した。

「うん………」

こうゆうこともたまにはいいですねー!!」

「……… そうか？」

でも、あんまし動くなよ。運転に集中出来なくなつて危なくなるから。」

「まあ…な。」

「グズグズしてると日が暮れちゃいますよ。」

「おお、そうだった。」

まあ、別に今考える必要がある物は見当たらないし……配達に行きますかあゝ

俺は目の前に居る……いや、俺に乗って居る阿求に「あまり動くなよ。」と、とがめると目の前から流れてくる景色を見ながら俺は長いような欠伸を一度する。

余談だが、

途中、横の窓から空を見ると、それは見事な日本晴れで今まで半年間の苦勞を忘れられる。そんな、濁りもなく綺麗に透き通っていて何処までも続いているような『青空』がそこにはあった。

「今日は天気がとても良いですね。」

「ああ、そうだな……」

阿求が俺の上に乗っていると言う恥ずかしいも気持ちも忘れられるくらいに……

おや、客の機嫌が……（前書き）

これはあまり変わらなかった…

おや、客の機嫌が……

ある程度里の配達が終わったこの頃。

俺はとある里の重要人物の家にへと宅配物を配達に来ていた。

家の戸の前までにやってきた俺は、戸に手をかけ

ガラガラ!!

何故か勢い良く戸を開く。

「えっと、ごめんください!!」

シーン……………

おっと、いつもならすぐに出てくるんだけどな。

俺は、玄関先でこの家の住人を待つが……

今日は配達先が多いこともあることもあり、とある考えが思い付く

……………

荷物を玄関先に置いて行けば良いんじゃないか？

自分の考えの通りに荷物を玄関先に置いて、帰ろうとした所……………

ココココココ……

「？」

後ろからどす黒いオーラが……

前途多難？

「なあ、何で客の帰りを少しでも待とうとお前は思わないんだ？」

ああ、死亡フラグが……立った。

~~~~~

「もう一度聞く。何でお前は客の帰りを少しでも待とうとしないんだ？」

「えっと、その……まあ、そんな感じ？」

そういえば……今日は満月の次の日だったっけ？

ちなみに今俺は、どす黒いオーラに押されて家の中に追いやられます。
恐い？

いや、それを超越してる…………マジで。

「えっと、今日は予約が何十件も入ってて。

……………夕方頃迄に借金滞納者にも配達しなきゃならないんですよ
え……………」

「そう、か……………」

俺が勝ったの「でも、今回は客に対する態度がなってならんな。」

「へ？」

俺は、そのまま肩を掴まれ壁際に寄せられる……………まさか！？

「そうゆうやつには教師として鉄槌をくださなければならんな。」

「いやあああ！！」

叫び声がアレ気にしない、気にしない……

……………

……………

「何だか光が戻って来ませんね……………」

一体、何をやっているのでしょうか？」

「いやあああ!!」

あれは、光の叫び声……………何かあったのでしょうか？

……………でも、厄介事に巻き込まれるのは嫌ですね。
そっとしておきましょう。

触らぬ神に祟りなしですから……………

~~~~~

「た、ただいま……………」

「何だか顔がやつれてませんか？」

「気のせいだ、気のせい。」

「それなら……………良いのですが……………」

いや、本当は散々な目にあったんだけどね……………  
変な心配をかけたくはないしな……………

「じゃあ、助手席が空いたから……………そっちに移動してくれないか  
？」

「……………す／／」

「何？」

何だ……………よく聞こえないぞ？  
更に顔が真っ赤だし。

「い、い、い……………」

い？

「嫌ですっ！！／／／」  
何だと！？

何故、そうなる！？

「えっと、何故そうなる？」

「だって……………私の身長が小さいおかげで  
外が見えにくい……………」

から。／／」

……………はあ、どうしようか？

阿求は顔を真っ赤にしながら言ってくるし……………  
恥ずかしいなら言わなきゃ良いのにな。

分かった分かった。

しょうがないし拉致があかなそうだから……

だから……

だからあ!!

「分かった。分かったから……乗って良いぞ。」

了承してやった……

**運送業者としての苦悩？（前書き）**

修正版を久しぶりに作りました。

運送業者としての苦悩？

「……………ふう」

「はあ……………」

俺と阿求は今「やっぱり長いですね……………この階段。」

「ああ、それには俺も同意する。」

あの有名な滞納者の所に酒と『請求書』を届けている。  
それにしてもやっぱり階段が長いな……………角度も急だし。

これじゃあ、無理して参拝しに来ようとも思わない理由が分かる気がする。

……………しかし、思っのは毎回毎回の話だが。

……………運送業社の苦悩……………

「宅配便ですー!!」

.....

うん、おそらく、完全にシカトだな。

ならば、どうすれば良いのか？

こうゆう時は.....これ、

チャリン

賽銭一択だ！！！

.....

あれ？

留守か？

『普通なら賽銭が入ったら.....目を輝かせて出てくるんはずだからな。』

『まさか、居留守な訳ないよな？』

と、俺はすぐさまに考えを広げていく.....が。

バシッ！！

「痛っ！！」

後頭部を誰に何かで殴られた。

まあ、軽くだから叩かれたに近いだろうけどな。

「んな事を考えてるんだったら……………ちょっとはお前も手伝うんだぜ……………」

「ああ、魔理沙か。

てか、じゃあ魔理沙は何に手伝ってるんだ？」  
てか、何がお前に分かる？

「霊夢の看病なんだ……………ぜ？」

「どうしてそこでクエスチョンマークが付くんだよ……………」

「まあ、そんなことはどうでもいいからこっちに来い。」

何故かは分からないが、俺は問答無用で魔理沙にズルズルと引きずられていく……………

「阿求……………」

そんな俺は、弱々しく阿求に助けを求めるが……………

「ちょっと、待ってくださいよ!!」

俺が思った事をよく分かっていなかったようだ。

あまりに予想外な事ばかりが起きるので、俺は思わず苦笑いを顔に浮かべる。

てか、今日はいろいろと……散々だな!!  
ホントに!!

~~~~~

「霊夢　客なんだぜ。」

「……………何、魔理沙。今、私は大変なんだけど……………」

「宅配便です。」

「ゲッ!!」

「霊夢? どうしたんだぜ!？」

よし、予想の通り。

…でも、顔色と表情を見れば……………具合が悪いのは一目瞭然だなあ
……………これは。

「ま、ま、魔理沙あああ!!　　アンタ、アンタっていうのは…
…私がこんな状態が悪い時になんって事をしてくれるのおお!!」
叫んでいる本人は基本的に無視をするが、俺はあの叩かれた後に何
往復もして運んだ宅配物を並べていく。

「はい、注文した酒。　ビール10ケースに日本酒。　これだけだ
る?」

「へ？」

「何だ？　まだ何かあったのか？」

「い、いや……」

追加で金を取り立てに来たのかと思ってたんだけど……」

「何なら取ってやっても良いぞ？」

「……………」

言い返す気力もない……………」か。

これは本当に具合が悪そうだな……………」仕方ない。

借りは作っておけば役に立つ時があるだろうから、仕方ない。

「ホレ！　受け取れ！！」

ビュ！！

俺はそう言つとバックからある物を取り出して霊夢に投げる。

パシ

「な、何よこれ？」

「チョコレートだ。」

甘いから良いエネルギー補給になるぞ。」

追加で例のアレをはつつけてあるがな。

「ちょ、これアンタ……………」

「な」に気にする事はないさ。

俺はこれから今日、最後の配達先に行かなきゃならないからじゃあな！！」

俺は、その言葉を残して神社から出て行った。

「あ、ちょっと……………待ってくださいよー！！！」

あ、そういやあ…阿求を忘れてたな。

~~~~~

「さっきは霊夢に何を渡したんですか？」

「気になるか？」

「はい。」

……………ここは、一発冗談でもかましてみるか。

「ラブレターだよ。」

「え？」

「いや、うそだ」

「……………」

わっははと、笑い飛ばす俺だが……………

「ホント、ですよね？」

何故か阿求は、何処か不安げな顔をしていた。

何故？

「ああ、そんなことを嘘ついて何の得になる？」

「です…よね。」

しかし…何か阿求の表情が暗くて寂しそうだな。

と、思った俺は……

「誤解を招くことを言って、ゴメンな。」

「あ、っえ……………／／」

詫びの言葉に添えて、お姫様抱っこというものをしてやった。

~~~~~

「何だ、何だ……」

「つて、霊夢…… あいつらイチャイチャやってやがるぜ!!」

「…………… 近くで大声を出さないでくれる… 頭が痛いから。」

「悪い、悪い……」

「でも、イチャイチャやってやがるんだぜ!!」

「!？」

「ホントね…………… でも、私には何にも関係ないから別に良いわ。それに、弱みにもなるだろうから…………… ブツブツ」

「おい、私を一人にしないでくれ!!」

「な、会話が… 二人が出た後の神社であつたらしい。」

本日休業日？

最初に言っておく。

店には必ず言っても良いと思うが、当たり前のように休業日がある。

特に個人経営な状態の業態ならばこれは完全当て嵌まるだろう。

こんな事を言っている俺だが、それには訳がある。
そんな訳というモノを答えは簡単だが予想してみてほしい。

簡単に分かる答えなんだがな。

俺も本日は輸送機（軽トラ）の点検の為に……『休業』だからだ。

そう、それだけ……………

本当にそれだけだ。

~~~~~

「ふう……………」

突然だが、今現在俺は、車（軽トラ）の点検をしている。

何故、そんなに突然なのかだって？

それは、約半年くらいに一回のペースで軽トラの点検をしているからさ。

壊れたらた代用品の営業車はないし、さらに今は初夏……………  
『これからの季節にエアコンとかが壊れたら……………』とか、考えると恐ろしくてね。

まあ、そんな訳で不定期に店の休業日を決めて点検をしている訳だ。不定期だから……………サボっている訳じゃないから別に大丈夫？だろ。

カチツカチツ

よし、タイヤを固定するボルトもちゃんと締まってるな……………

~~~~~

A M 11:30

ようやく、軽トラの点検が終わった。

俺は首を一回程回して一息つく。さて、昼飯でも食べるかな？

と、思つて倉庫から歩き出したがしかし、その時だった……

「すみません!!」

『ちよつ、マジで………幻想郷に居たのかよ!?!』

「荷物を届けて欲しいのですが………」

そこでだ、銀髪のメイドにあつたのは………

~~~~~

「あ、さつき点検が丁度終わったんで………」

汚れたこの服を着替えるのでそこで待つててくれませんか？」

「あ、はい。」

とりあえず、汚れたこの服では接客も出来ないのでは………悪いが待つてもらふことにしよう。

~~~~~

「はい、お待たせしましたー」

「あ、別に大丈夫ですよ。」

「で、今日の依頼される荷物と場所をお聞きしてよろしいですか？」

「荷物はここに置いてある物で、場所は紅魔館でよろしく願いますわ。」

『……………は？』

てか、この荷物の量をこの人はどうやって運び込んだんだ？

「私の能力の一部とを考えてくだされば。」

はは、心を読まれるとは……………

「で、配送先ですが……………」
「貴方がわからない？」
「はい、そうですね。」

紅魔館……………か。

噂でもそのような洋館など聞いたことがないな。

何故分かったと言われてもさ……

メイドがいるなら洋館って普通予想がつくだろ。

「大丈夫、私も乗って行きますわ。」

てか、何か……完全に運送業者を便利屋扱いしてやがる。

何か、腹が若干立ってきたから…かまをかけるように何か言ってるか？

「何か？（ニコツ）」

「いや、何でも。」

はあ……しょうがない客は客。

さらに初対面だから評判の為にこれくらいだったら我慢に我慢を重ねろ。

ぐつと堪えた俺は立ち上がると……

「さて、暗くなる前に行きましょうか？」

「そうですね。」

とりあえず、軽トラを駐車している場所へ行くように促した。

…早くも、『この人と喋っていると精神力が削られる……』と思い、
気がついてしまった俺。

今回はちょっと道のりが長そうなのに……大丈夫か？

『大丈夫だ、問題ない』とは笑い事でも言えない……
言えない俺がいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6489x/>

幻想の運び屋 改訂Ver

2011年11月4日08時10分発行